

東海建築アーカイブ 羽島市庁舎 坂倉準三

加藤悠介(金城学院大学)×生田京子(名城大学) ×臼井直之(岐阜市立女子短期大学)

【概要と感想】

生田 : この建物を見てどう思いましたか。

加藤 : モダニズム建築の中でも結構華奢な印象がしました。特に、バルコニーの手すりを板状に平たくしていたことが印象的で、奥行きがなく軽やかな感じがしました。

生田 : たしかに華奢で繊細な感じの建物です。その華奢さゆえに、現代において構造補強などは大変そうな印象はありますね。

加藤 : とはいっても、モダニズムの傑作といわれるような雰囲気はありましたね。

生田 : 近代建築のミースなどの鉄骨造の軽やかさを RC で出しているという印象です。手すりを平たくしているのもなにか薄いものをつけているという感じで、軽やかな S 造の雰囲気を持っている RC 造だと思いました。あとは最初の巨大なスロープが印象的でした。

加藤 : 車が建物内を通り抜けられ、2階の庁舎エントランスにもアプローチできる車用のスロープと、歩行者用のスロープがありました。

生田 : 歩行者用のスロープは4階に向かうための空間で、昔は、1・2階は庁舎機能で、3階は図書館、4階は講堂と傍聴席でした。一般の人は外のスロープを歩いて4階に向かうというのがダイナミックな構成で、さらにその先に塔があるというのがロマンチックですよ。

加藤 : そうですね。当初の図面を見る限りは、4階までスロープで上がった後の空間は半屋外として計画されています。スロープからドアなどで区切ることなく、講堂や傍聴席に行けるようになっていて、1960年代という時代背景にもとづく民主主義の理想を空間に表現したのではないかと感じました。

生田 : 建った当初は市の中心となるように建てられたことでしょうか。当時は田園の中に建っていたというような話もありますし。

加藤 : 竣工当時とはずいぶん周囲の印象が変わったようです。周辺の風景が変わっていくのは建築にとってどういう影響があるのだろうと考えますね。田園のなかに建っているときと、現在の建物が点在している場所で建っている場合と、羽島市庁舎のたたずまいが与える印象も大きく違うのかなと感じました。建築が当初建っていた風景までもコントロールすべきではないのかもしれませんが、建築の力が削がれているのかなと思いました。当時の鳥瞰写真を見ると、この建築が池や周辺との連続性も持っていたのがわかります。

生田 : 将来の街の軸線だとか構成をどのように予測されていたのでしょうかね。

加藤 : 中心市街地とかなり離れた土地ならではの建築の姿だとは思いますが。

生田 : そうですね、湿地帯にポツンと建っているのはさぞ美しかったですよね。けれど現代においてはごちゃごちゃした建物が周りに建っていますね



【平面計画について】

生田：プランについてはどうでしたか。

加藤：市庁舎のところはオフィス建築の明快なプランと思いました。フロア中央に中廊下を通し両側に部屋が並び、部屋には大きな窓があって採光を取っている。照明や空調の設備が整っていない当時ではこの計画が最適であったのではないのでしょうか。

生田：確かに。あとの時代に機能に対応するような変化には対応しやすいプランだと思います。

加藤：単純なプランですよ。

生田：外部はすごくドラマチックに作り、中は特別な用途でない限りシンプルに作っていますよね。

生田：公共施設の変遷の歴史を感じる建物でしたがその中にあった機能が外に別の建物として作られてきていて、いまとなつては図書館も講堂も外に出ていき、現在では議場と庁舎としてのオフィス機能だけ残る形に変化してきましたね。

加藤：そうすると外の歩行者用スロープも人が通らなくなりますよね。

生田：そうですね。そこでスロープの機能がやや薄れて、最後の議場だけが上昇へのモチベーションになりましたね。

加藤：スロープで言うと、現在は車椅子が利用できるという特性が強調されている点が興味深いところでした。そのため建物内にはエレベーターも設置されていませんでした。

生田：スロープがついているので一応担保されているのですね。

加藤：ほとんど改修されていなくて、当時の面影を残している議場の雰囲気や印象はどうでしたか。

生田：屋根が曲線で印象的です。どこかロンシャン礼拝堂を思わせるような雰囲気の窓の付き方をされていて、柔らかい曲線と光の入り方をしている議場だったと思います。

加藤：当時のままの空間として議場が残っているのは大変貴重だと思います。議場の隣にあった吹き抜けにもロンシャン礼拝堂のような小窓があるのですが、現在は吹き抜けに床が設置され、そこに議員の部屋が増設されたため、小窓は隠れてしまっています。建築家の意図がディテールにまで感じ取れる空間がトータルで残っていてとてもよかったと思います。

生田：確かに、議場が内部の空間として一番保存されている部分ではありますよね。それに対して下の階は時代と共に変化しているということですね。



【活用について 可能性 どう活用すべきか】

加藤：羽島市庁舎の保存や活用について、市民がどう考えているかのアンケート結果が市のホームページに載っています。回答者 538 人、反対 221 人、おおむね反対 171 人、どちらでもない 84 人、賛成 17 人、概ね賛成 16 人となっています。

生田：絶望的な数字……。気持ちだけでは残せない、ギャップがありますね。坂倉氏の出身地の建築として残してほしい気持ちはありますが、市民に困難さを感じさせるところは、想像以上に華奢であるというところですかね。

加藤：そうですね、一番はじめに受けた印象のところに戻りますね。

生田：これが RC 造でも骨太であれば構造補強もやりやすいと想像できるのですが、華奢な RC なのでそれを補強するのが難解に見えるとうところですかね。

生田：しかし、何もなかったところにこれが建ち、羽島市の文化を形成してきたので、市庁舎の機能としてそのまま残すのは難しいと思うのですが、なにか他機能で転用されていくと嬉しいです。

加藤：反対の数を見ても保存するのは難しいのが現状だと思います。しかし、活用で新しい意味をもたせることもできるのではないのでしょうか。これまでの歴史を伝えるのは市庁舎が残る目的にもなると思いますし。どんなものに転用できるかが難しいところですが。

生田：どんなものが……。難しいですね、端正な雰囲気ギャラリ-的にも見えるのですよね。なにか良い活用方法が見つかるといいですね。

加藤：市庁舎は昔の建物といっても、意外と広い床面積があります。この床面積を一つの機能で満たすことは難しいと思います。それこそ、公共施設がもつ堅い雰囲気の側面が出てきてしまうのではないかと。

生田：逆に市民的な活用の仕方、子育て関係もあるのかなと思います。ラーメン工法なので如何用にでも空間をくぎれるので手の加え方の制約は少ない方なのかな。光がさんさんと入り、上から下まで明るい環境なのでそれに向けた利用内容がいいと思いますけどね。

生田：福祉施設に活用するといっても子育てとか中高生の居場所とかが良いですかね。

生田：隣が市庁舎でその近くに居場所ができるっていうのはいいと思いますけどね。

加藤：話は変わりますが、イギリスでは 1960 年代に建ったモダニズム建築でも保存対象になり補助金も出ているそうです。仕組みとしてもおもしろくて、デザインとして残すべき箇所、例えば、柱と梁のグリッドの形を指定して、それ以外は自由に改修できるというものです。改修方法にも幅が出てきて、いろいろな活用の道が開かれていそうでした。こういう仕組みが日本でどこまでできるかわからないですが、補助金を使って活用を促進する視点は今後重要になると思います。しかし、そのためには市民、日本人の保存と活用に対する共感意識が醸成されないと難しいですよ。

生田：DOCOMOMO にも選ばれているので……。この建物だけではなくて近代美術館も議論になっていますよね。

加藤：これを機会に日本の保存の制度を考えるべきですよ。

生田：確かに 1 つの建物、1 つの市だけの問題として捉えるのではなくもう少し全般的に考えられるといいのかもしれないですね。

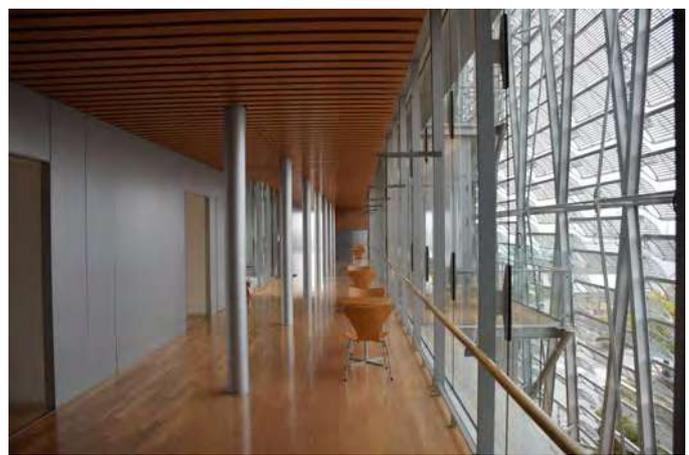
東海建築アーカイブ ドリームコア ソフトピアジャパン

加藤悠介(金城学院大学)×生田京子(名城大学)×臼井直之(岐阜市立女子短期大学)

【概要】

加藤：起業を支援するというのは、時代の速い流れや変遷をどう捉えるかが重要ですよ。大江さんは大組織ではなくて、個人個人がネットワークでつながっていくというイメージをもとにこの施設を設計されていますね。まず概要の説明からはじめます。

この施設は、IT 関連企業が集積する地域(ソフトピアジャパン)の中にあって、IT ベンチャー企業の支援をしたり、人材育成を目的に 2000 年に開設されています。ファサードの東面には印象的なアルミのパンチングメタルが使われています。その内側には半屋外のプロムナード空間があり、内部空間の廊下と続いています。さらに奥は人材育成のためのインキュベーションルームと研修室や会議室のゾーンに分かれています。起業したい人がオフィスとして借りられるインキュベーションルームは 100 室あって一室の広さは 22 m²で、2つ繋げての利用も可能で、その場合 44 m²の広さになります。



【ソフトピアジャパンという地域について】

加藤：訪れた際に最初に目が行くのは、やはりソフトピアジャパンという集積地域ですよ。この地域の印象についてお聞きしてもいいですか。

生田：建物はかなり特徴的な建物が整然と建っている雰囲気でしたね。本当に新しい街として作られたような。ただ、航空写真からもわかるように、建物のすぐ近くにばらばらと住宅が建っており、昔はおそらく農家住宅が主であったと思いますが今は近縁が宅地開発されているように思いました。

加藤：そうですね。私が結構驚いたのは信号が無いことでした。未来の都市像というか、効率性を重視した街になっているなという印象でした。

生田：もう少し詳しくお聞きしてもいいですか。

加藤：建物が整然と建っていて、直線による区画割りになっていますよね。

生田：直交軸であるということですね。

加藤：そうです。そこに信号が無いと、とてもスムーズに移動ができるので、そこに集積のメリットがあるのではと感じました。この地域の中で様々な企業が連携してお互いに補い合い、刺激を受け合いながら起業していつて、IT 産業を盛り上げるためには、こういう整然としたグリッドを自由に動ける環境が適しているという解答を

見た気がしました。

生田：一つの都市ビジョンがあったのではないかということですね。私がストーリーとして面白い、楽しそうだなと感じたのは、最初はドリームコアの小さな空間を借りて起業を始めた人が、やがてこの地域の中でももう少し大きなフロアを持つ、例えばセンタービルに移って、そのあとさらにこの地域のすぐ近くに本社ビルを建てたという実話です。つまりこの地域の中で次々と移動していき、やがて外部へ羽ばたいていく、そういった企業のサクセスプロセスが起きているという事ですね。

加藤：それはとてもおもしろいですよね。若い企業も成功した企業も一緒の地域にいるというのは、とても刺激があると思います。

【ドリームコアについて】

生田：建物についてはどういった印象でしたか。

加藤：デザインしたいことが明確でわかりやすい印象でした。画一的な地域では、人の姿が見えづらいという懸念がありますよね。特に車で移動するようなどころだと現れやすい。しかし、このドリームコアはアルミのパンチングメタルとプロムナードと廊下という人が移動する空間を前面に計画され、内部での活動が外部に溢れ出すような雰囲気をもっており素晴らしいプランだと思います。それにファサードの作り方が洗練されており、居心地のいい空間でしたね。

生田：たしかに、すごく無駄が無いような、必要な機能だけをスムーズに作られている印象でした。それに、訪問したときに古びた印象は全く受けませんでしたね。

加藤：凄いことですよ。

生田：19年経っている建物とは思えないくらい綺麗でしたね。無理のないディテールで、メンテナンスに配慮した設計をしているので、去年竣工と言われても違和感のない雰囲気でした。

加藤：プランについてはどうでしたか。

生田：プランに無駄が無い感じがしますね。プロムナードという表に開いた箇所を一つ設けておいて、内側にはインキュベーションルームの分節や実習室と研修室などといった可変的に使えるような構成になっているなどですね。インキュベーションルームは、各部屋の空調設備を壁埋め込みにしており、予測される分節ごとにそのような設備が作られている設計はスッキリしていますね。

加藤：インキュベーションルームは、中廊下ではなくて、北と南の2本の廊下からアプローチするようになっていて、部屋の奥の壁に空調設備が設置されています。これも、室外機や配管が外に出ないように設計されています。

生田：設備に関して洗練されていると思いますね。

生田：インキュベーションルームの外廊下についてはどう思われましたか。

加藤：外廊下にできたのは、空調設備の工夫によると思いますが、設計意図としては、インキュベーションルームの一つ一つに独立性を与えるようにしているのではないかと感じました。

生田：それに、外廊下を経由して採光を取るようなプランになって入り口と窓採光が外廊下に面していますが、おそらく設計者の意図としては、外の廊下を歩きながら各インキュベーションルームで何をしているのかがわかるので、例えば挨拶を交わすなどでコミュニケーションがとられて、ネットワークが広がっていくということ

想定していたのでしょうか。そういった事はある程度起きていると思います。一方でルーバーで閉じている部屋もあるので、その辺が難しいように思いましたね。ただそれでも、完全に閉じて中で何が起きているのかわからない様な状態よりは、ルーバー越しでもお互いの雰囲気が感じられるようになっている方が良いと思います。

加藤：そうですね。居るかどうかはわかりますし、光が漏れるなどの気配を感じることもありそうですね。

生田：それに起業ですので、特許関係などで秘匿性が求められるような場合もありますから、閉じる必要性も生じるのだと思います。開放したり閉じたりは、場合によりますね。

加藤：コミュニケーションが起きていそうな予感がしましたか。

生田：全体がとても綺麗で整然としているので、インキュベーションルームにいる方たちが雑談できそうなくだけた雰囲気の場合は少なそうでしたね。全体的に雑談を許すようなゆとりスペースのようなものがあると、入っている企業が相互にコミュニケーションが活発化するのではないかと思います。

加藤：コミュニケーション空間としてはアルコーブがあるのではないのでしょうか。

生田：なるほど。期待されているということですね。

生田：設立時には入っていなかった一階のファブコアは雑談できそうな雰囲気でしたね。

加藤：そうですね。ファブコアは工作機器の管理や操作方法を教える人が常駐していたり、試作品など物が溢れている空間でしたね。ドリームコアの利用者以外の人でも使える部屋になっていて、気軽に入りやすい雰囲気になっていた印象がしました。



【都市構造と入居者について】

加藤：これは建築の問題ではないのかもしれませんが、岐阜県の方針として各務原でものづくりを行い、大垣でIT関連を進めています。ものづくりとITを離れた政策であることが影響していると思うのですが、ドリームコアでは、研修室など空いた部屋をどのように活用するかで困っているようでした。

生田：確かに。ITという主旨にあっていないと入居できない故に、制限がかかっている印象でしたね。少しは、何をやっているのかわからない変わった人が入居していたほうが、ダイナミックな活動になるかもしれないですね。門外漢ですが(笑)

生田：建物的には、機能的にかつ設備的にスムーズに解かれているので、中の考えさえ変われば如何様にも改変できるつくりになっていますね。

加藤：例えば、入居する人が変われば、建物の使い方も変わると思います。

生田：大元の運営者の考え方次第ですかね。それは行政なのかもしれませんね。

加藤：他に、周辺に住む人たちがもっと利用できるようになると変わると思います。ファブコアはその一例ではないでしょうか。

生田：実はすでに使っている地域住民の方もいるかも知れませんね。ただ、あまり表立ってみえて来ずに密かに紛れ込んでいるのかも。

加藤：駐車場が沢山あって、むしろ足りないくらいと職員の方がおっしゃっていたので、車が目立ってしまっているのですが、実際は多くの方がソフトピアジャパンに来ているようです。文化祭やイベントなども積極的に行っているんで、ここから新しい都市文化が生まれるかもしれませんね。